

メディア論

第5回 戦争報道と情報操作

担当: 野原仁

現代の戦争

- 戦争：基本的に「国家の、国家による、国家のための武力対立を特徴とする暴力表現」
- 現代の戦争＝総力戦＝前線の兵士や後方体制を含む軍事力だけではなく、国家全体の人員・物質・思想・情報などすべての資源を用いる戦争の形態
- 特に、情報の重要性がますます重要になってきている→現代の戦争＝情報戦争

戦争におけるプロパガンダの重要性

- 情報戦争である現代の戦争においては、自国民に対しては「戦争の意義」を訴えて、戦争への支持を得ることが不可欠
- また、自国民だけでなく、できるだけ多くの（国際的に影響力を有する）他国や国際機関からの支持を得ることも不可欠
- 支持を得るための重要な手段のひとつがプロパガンダである

戦争におけるプロパガンダの特徴

- 日常時と比べて、露骨で強引に、そして大規模に行われる傾向にある。
- どの時代のいかなる戦争も「正義の戦争」などは存在しないことを指導者が理解しているがゆえに、必ず「正義はわれにあり」と人々を戦争に駆りたてる。
- 現代の戦争では、相互に情報戦を重視しているため、必ずプロパガンダが行われる。
- 視聴者・読者は戦場を実体験できないため、情報操作が容易に行うことができる。

戦争プロパガンダ10の法則

1. 「われわれは戦争をしたくない」
2. 「しかし敵側が一方的に戦争を望んだ」
3. 「敵側の指導者は悪魔のような人間だ」
4. 「われわれは領土や覇権のためでなく、偉大な使命のために戦う」
5. 「われわれも誤って犠牲を出すことがあるが、敵はわざと残虐行為に及んでいる」

6. 「敵は卑劣な兵器や戦略を用いている」
7. 「われわれの受けた被害は小さく、敵に与えた被害は甚大」
8. 「芸術家や知識人も正義の戦いを支持している」
9. 「われわれの大義は神聖なものである」
10. 「この正義に疑問を投げかける者は裏切り者である」

戦争報道の作られ方と 情報操作

→テキスト参照

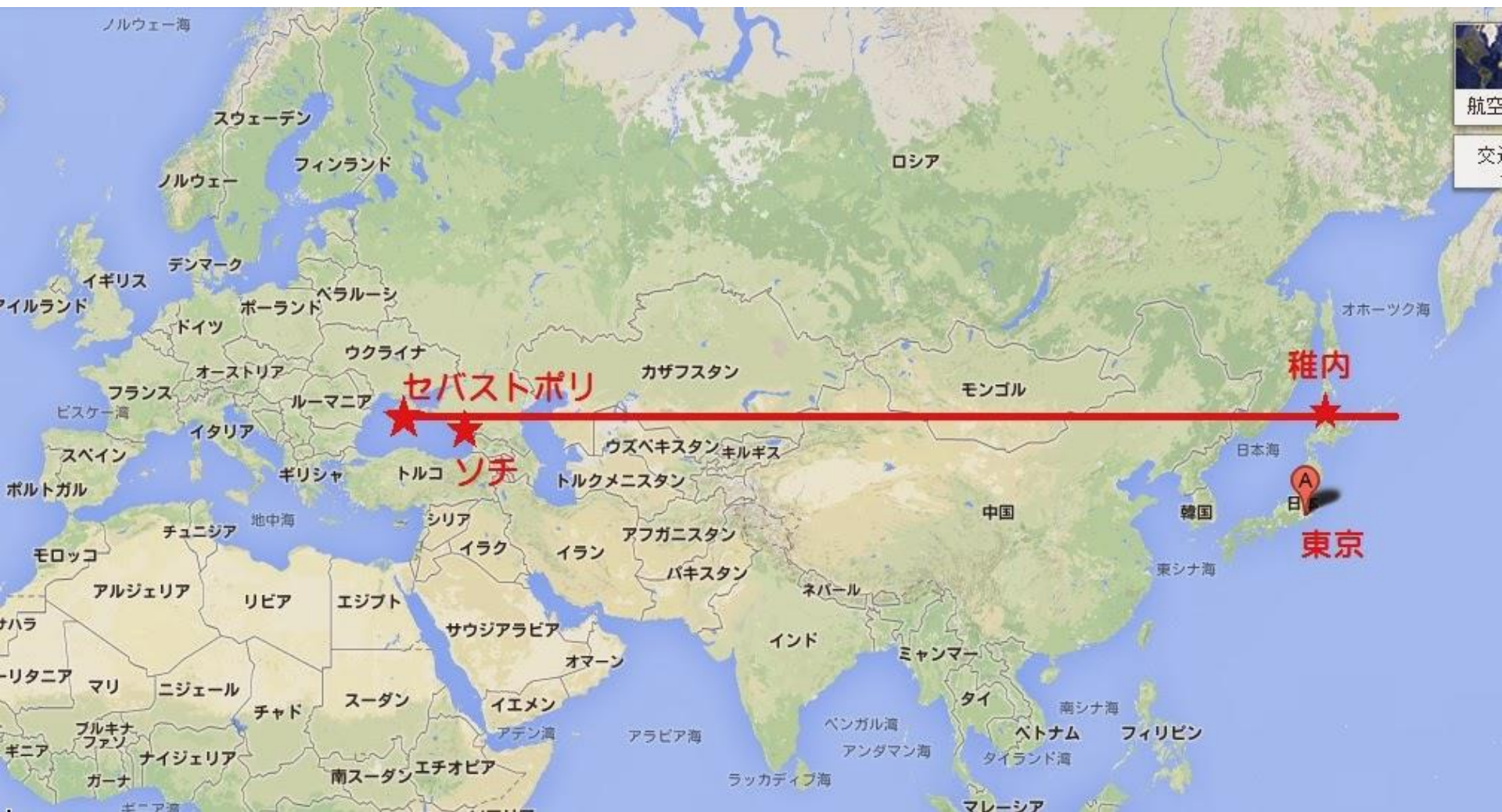
戦争報道における情報操作の具 体例①

→テキスト参照

戦争報道における情報操作の具体例②

- NHKスペシャル『そしてテレビは戦争を煽った』(2016年5月21日放送)

2014年の“クリミア併合”は、かつて兄弟国家と言われたロシアとウクライナに大きな亀裂をもたらした。双方のテレビメディアは相手への憎しみをあおるようになり、偏った報道に流れてゆく。報道をみる人々も次第に片方の主張だけが正しいと思うようになってゆく。そしてネットに氾濫した映像を都合よく使って敵意をあおる報道にまでエスカレート。“戦争”が起きるとメディアに何が起きるのか？ジャーナリストたちの苦悩に迫る。(番組HPより)



ウクライナ東部の領土問題

分離派はドンバス地方のみの独立を求めているが、プーチン露大統領や一部の親ロシア派は「ノボロシア」地域についても言及している



出典：ウクライナ政府

* 親ロシア地域

AFP